

## 昭和 20 年の国民学校一年生が体験した戦中・戦後の世相 —戦争のない平和な社会の存続に向けて—

長岡 壽 男\*

大阪青山学園理事

### Recollections of the Pacific War in the eyes of a school kid

Hisao NAGAOKA

Osaka Aoyama Gakuen

**Summary** Seventy years have passed since the end of the Pacific War. It would thus be meaningful to undertake various studies on this Great War. At the end of the War in 1945, the author was a public primary school first grader. Although he was just a small kid, he recalls those eventful hard days vividly.

In the present article, he writes about his experiences and memories of those days, such as miserable daily lives caused by the war, terrors of air raids, collapse of all urban lives, and the whole turmoil caused by social changes ensuing thereafter. In view of those regrettable times, we must thank the fact that Japan has so far been a peaceful country.

Since the number of people of younger generations who do not know about the last war is now increasing, the author would feel exceedingly happy if they could understand rightly the peaceful status of today's Japan after they read his experiences and memories of those days described in this article.

### 1 はじめに

本年（2015 年）は戦後 70 年の節目にあたることもあり、これにかかわる行事が各方面で執り行われている。また、来し方の諸問題について、多方面の研究活動が現在も活発に繰り広げられている。政治面においても、安全保障関連法案の成立をめぐり、様々な意見が交わされていた。議論の是非はともかく、「戦争を知らない」世代が圧倒的多数になってきたことから、戦争記録を如何に伝えていくかは、喫緊（キツキン）の重要なテーマといえる。悲惨な戦争や恐怖の空襲体験、食糧難や耐乏生活について、理屈では分かっているが、「戦争を知らない」世代には実感が伴わないであろう。それゆえ、「平和」な社会とは、一体、どのような社会であり、また、どのように築いていくことが望ましいのか、改めて問い直してみる必要があるのではないだろうか。

筆者は、丁度、昭和 20 年（1945 年）に国民学校<sup>①</sup>に入学した世代であるが、短期間とはいえ戦争中の教育を受けた最後の学年である。戦時中及び戦後の混乱期（昭和 19 年～昭和 24 年頃）の世の中について、子どもの目を通して感じたこと、体験したことは、今も鮮明に心に残っている。なぜ、あのような無謀な戦争が起きたのか、大事な開戦通告がなぜ遅れたのか、連戦連敗の続くなかで、なぜ戦争を止めることができなかったのかなど、近現代史の専門家の間でも各種の議論がある。しかし、本稿では、幼少の頃の残像や、思い出の断片を拾い集めて、紡ぎ合わせるにより、戦争という歴史的惨事が人々の生き方にどのように影響を及ぼしたのかに焦点を当てることとしたい。戦中、戦後の生活体験をありのままに記述し、これからの社会のあるべき方向について、考える材料を提供できればと思う。

---

\*Email: hisao@sakura.zaq.jp  
〒562-0046 箕面市桜ヶ丘2-6-3

なお、著名な研究者による著に、徳永徹『少年たちの戦争』と西尾幹二『わたしの昭和史1,2』がある。少年時代の思い出や体験を、日記などを通じて詳細に記述されている。また、当時、医学生であった体験や日記を通して、山田風太郎『昭和前期の青春』も素晴らしいと思う（これらについて文献番号15、17、21を参考にされたい）。

本稿の構成は、まず、**2. 戦争中の生活**において、幼児の頃の思い出、疎開先の国民学校での思い出、当時の学校制度と教育内容、戦時下の食糧事情と生活、そして、戦時中の憩いという視点から、当時の記憶をもとにたどる。次に、**3. 戦後の世相**では、終戦後の国民学校、食糧難と貧しい生活、新しい教育制度、終

戦後の社会風景、多くの犠牲を払った戦争という視点から述べる。さらに、**4. 新しい日本に向けて（復興と社会づくり）**においては、厳しい生活事情のなかで復興に向けた社会づくりや新しい日本を目指す社会に関して触れる。なお、幼い頃の記憶や体験は、正確性に欠けるところが懸念される。したがって、成人になって得た知見をもとに不備を補うことにも努めた。最後に、**5. むすびにかえて**において、戦中戦後を生きてきた者として、ささやかな経験から得られた見解をまとめとして提示する。

本稿で取り上げている時代について、年表を付しているので参考にされたい（表1－(1)、(2)、(3)参照）。また、参考文献はすべて文末に記している。

表1－(1) 昭和における主要な出来事と戦争（昭和10年～16年）

年	(月日) 政策決定・事件など	内容
昭和10年	天皇機関説の論議	
	政府国体明徴を声明	
昭和11年	2.26 二・二六事件	青年将校によるクーデター
	8. 7 国策の基準決定	大陸・南方進出と軍備充実決定
	11.25 日独防共協定調印	
昭和12年	7. 7 日中戦争始まる	盧溝橋で日中両軍衝突
	8.13 上海にて日中両軍交戦	
	11.20 大本営設置	
	12.13 日本軍南京占領	虐殺事件おきる
昭和13年	1.16 物資動員計画発足	
	4. 1 国家総動員法公布	
	10.27 日本軍武漢三鎮を占領	
	11. 3 東亜新秩序建設	近衛首相声明
昭和14年	5.12 ノモンハン事件	
	7. 8 国民徴用令公布	
	9. 1 第二次世界大戦始まる	ドイツ軍ポーランド侵入
	12.26 朝鮮総督府創氏改名強制	
昭和15年	7. 6 奢侈品等製造販売制限規則	「ぜいたくは敵だ」の標語
	9.23 日本軍北部仏印進駐	
	9.27 日独伊3国同盟調印	
	10.27 大政翼賛会発足	
	11.10 紀元2600年祝賀行事	
	昭和16年	1. 8 東條陸相戦陣訓示達
	3. 1 国民学校令公布	
	4. 1 米穀配給通帳制・外食券制	
	4.13 日ソ中立条約調印	
	4.16 日米交渉開始	ハル国務長官と野村大使
	7. 1 隣組制度活動開始	
	10.18 東條内閣成立	
	11.26 ハル・ノート提示	
	12. 1 御前会議開戦決定	対米英蘭との開戦
	12. 8 真珠湾、マレー半島攻撃	
	12.16 戦艦大和竣工	

表1－(2) 昭和における主要な出来事と戦争(昭和17年～20年)

年	(月日) 政策決定・事件など	内容
昭和17年	1. 2 マニラ占領	
	1. 9 学徒勤労動員開始	
	2.15 シンガポール英軍降伏	
	4.11 バターン半島占領	
	4.18 米軍機東京ほか初空襲	名古屋、神戸も空襲される
	6. 5 ミッドウェー海戦	海軍に重大被害
昭和18年	12.31 ガタルカナル島撤退決定	2.1 撤退開始
	1. 2 ブナにて日本軍玉砕	ニューギニアの戦場
	1.13 英米楽曲演奏禁止	約1,000種指定
	4.18 山本五十六戦死	ソロモン上空にて襲撃される
	5.29 アッツ島にて日本軍玉砕	
	8.17 上野動物園猛獣襲殺	空襲に備えての対応
	9.30 絶対防衛線の後退	(9.8 イタリア降伏)
	10.21 出陣学徒壮行会	神宮外苑競技場にて開催
	11.25 マキン・タラワ島玉砕	
	昭和19年	2. 6 クウェゼリン・ルオット両島の守備隊玉砕
7. 4 インパール作戦中止		大本営が失敗を認める
7. 7 サイパン島守備隊玉砕		
8. 3 テニアン島守備隊玉砕		
8. 4 国民総武装決定		竹槍訓練開始
8.10 グアム島の守備隊玉砕		
昭和20年	10.25 神風特攻隊出撃	レイテ沖で米艦に攻撃
	2. 4 ヤルタ会談	米英ソ首脳会談
	3.15 大都市の疎開強化決定	
	4. 1 米軍沖繩上陸 6.23 占領	(5.7 ドイツ降伏)
	7.26 対日ポツダム宣言発表	
	8. 6 広島に原爆投下	
	8. 9 長崎に原爆投下、ソ連参戦	
	8.15 天皇終戦の詔勅放送	御前会議でポツダム宣言受託
9. 2 降伏文書調印	米戦艦「ミズーリ」艦上にて調印	

## 2 戦時中の生活

### 2-1 幼児の頃の思い出

筆者は、昭和13年4月兵庫県西宮市今津綱引(アビキ)町で生まれた。両親と子ども4人の家族で、末っ子であった。西宮での幼児の頃の思い出は、今となっては断片的なものばかりである。戦局がまだ厳しくなっていない頃は、父に連れられて、甲子園の浜まで歩いて海水浴に行ったことを覚えている。当時の甲子園海水浴場は、子どもたちで賑わっていた。しかし、甲子園の阪神パークが軍の施設になるなど、周辺的环境に変化が現れると、次第にさびしい場所になっていった。また、近所から出征する人を「万歳!万歳!」と激励しながら送り出す様子を覚えている。街角まで「勝ってくるぞと勇ましく、誓って国を出たからは…」と軍歌「露営(ロエイ)の歌」を歌いながら、日の丸

の小旗を振って見送ったが、送り出される兵士の様子に、何故か元気がなかったことを覚えている。

父の弟(叔父)の徴兵が決まり、入隊前に我が家へ挨拶にやってきて、2~3日泊っていった。各方面への訪問の後と思われるが、ある夜泥酔して帰ってきた。父は何も言わず、家族に対して「そっとしておいてやれ」といっただけであった。この叔父は入隊後、輸送船で南方に向かったが、この船が敵潜水艦に撃沈されて、戦地に着く前に帰らぬ人となった。ふりかえれば、戦地に行くことへの恐怖や世間に対する惜別の気持ちから、深酒になったものと考えられる。あの場面を思い出すと、この叔父のことを、ただ不憫に思うばかりである。

西宮今津にあった幼稚園にはほんの少しの期間だけ通園したことがあった。自分よりも一年先に入園している同年次の子どもが、我が物顔で万事を仕切ってお

表 1 - (3) 昭和における主要な出来事と戦争（昭和 21 年～ 26 年）

年	(月日) 政策決定・事件など	内容
昭和 21 年	1. 1 天皇「人間宣言」	
	1. 4 軍国主義者の公職追放指令	
	3. 6 憲法改正草案要綱発表	
	4.20 財閥解体の本格的開始	
	5. 3 極東国際軍事裁判開廷	東京裁判
	5.19 食糧メーデー	
昭和 22 年	10.21 第二次農地改革法的措置	20 年 12 月 9 日 GHQ 農地改革の覚書
	12.27 傾斜生産方式開始	
	1.31 「2. 1」スト中止	マ元帥の指令
昭和 23 年	4. 7 労働基準法公布	労働民主化のため
	5. 3 日本国憲法施行	
	11.12 東京裁判判決	12.23A 級戦犯 7 名の死刑執行
昭和 24 年	12.18 経済安定 9 原則	
	4.15 ドッジ・ライン	健全財政主義の徹底
	7. 5 下山事件	7.15 三鷹事件、8.17 松川事件
	9.15 シャープ勧告	戦後の日本税制改革案
昭和 25 年	12. 1 外国為替・外国貿易管理法	外国貿易の発展・振興などを目指す
	6.25 朝鮮戦争勃発	7 月以降朝鮮特需ブーム始まる
	7.24 企業のレッドパージ始まる	
昭和 26 年	11.24 電気事業再編成	
	7.10 朝鮮休戦会談始まる	
	9. 8 サンフランシスコ講和条約調印	占領体制は終結

注 矢部洋三他編著『新訂 現代日本経済史年表』日本経済評論社および三國一朗『戦中用語集』岩波新書参照。

り、ブランコ、滑り台などを使用する際、その兄の了解を得ることが園児の中での暗黙のルールとなっていた。そんなことが嫌になって、ほどなく登園を拒否するようになった。しかし、一つだけ覚えていることがある。晴れた日は幼稚園の運動場で出席をとり、その後、ピアノの伴奏に合わせて園内に入るようになっていた。この楽曲が後になって、ワーグナー作曲の行進曲であることが分かった。当時、すでに英米の音楽は禁じられていたが、ここでは不問なのが不思議に思っていた。何のことはない。同盟国ドイツの作曲家であり、この音楽は演じて大丈夫だったことになる。

なお、甲子園球場に近い自宅近辺では、中等学校野球大会の開催期間中は、球場からの大歓声が聞こえたという。しかし、戦争の激化とともに、野球は禁止されており、その後球場は軍が使用するようになっていた。

当時、両親は、子どもたちの進路について真剣に考えていた。製造業の管理者として勤めていた父は、平素から兄に対して、旧制高校の理科に進むことを勧めていたようである。文科なら必ず学徒出陣<sup>(2)</sup>を覚悟しなければならなかったが、理科の学生の場合、出征することはなかったからである。命を守りたいという

親の思いを、子どもにしっかり伝えていたことになる。また、都会の高校は難関であり、且つ空襲の危険があり、受験に際しても、地方の学校を選択させていた。当時の高校の多くは全寮制であったが、食糧のない時代でもあり、母は、頻りに兄の所へ食糧の補給に足を運んでいた。幼かった私の手を引いて、姫路までコメやイモを運んでいたという記憶がある。

その後、京都は空襲がないと見られていたことから、兄は京都帝国大学工学部に進学したが、これも親の意向が反映されていたものと思う。兄と同年齢のいとは、東京帝国大学法学部で三島由紀夫と同じ教室にいたが、昭和 20 年学徒出陣の命を受けて入隊した。しかし、幸いなことに、ほどなく終戦を迎えて大学に復帰することになった。他方、理系の学生であった兄の場合は、食糧事情の問題はあったものの、当時の制度の中で、無事に学生生活を過ごしたといえる。

長姉は、親の元から通学できる場所として、神戸女学院専門学校（当時の女専、現在の女子大）に入学した。当時は敵国語を学ぶことは避けねばならず、結局、家政学を専攻している。戦局が悪化を辿り、日本各地への空襲が激しくなり、住んでいた今津あたりも厳しい生活環境となった。ある時、空襲警報とともに

爆音が近くに迫ったため、姉は町内にある防空壕に入ろうとした。しかし、すでに避難者で満杯になっており、これ以上、入ることを拒否されてしまった。爆撃が激しくなり、仕方なく布団をかぶり付近の溝に伏せていたが、先程の防空壕（ボウクウゴウ）に直撃弾が落ち、壕内の避難者全員が死亡する場面に遭遇したという。火災の発生もあり、住居のあった一帯は、ほど無く焼け野原と化した。幸いにも、本人は九死に一生を得たが、生涯にわたって、この惨劇について自分から積極的に口にすることはなかった。

母と次姉及び私は、この空襲以前に（昭和20年4月）に富山県新湊市（現射水市）に疎開（ソカイ）していた。祖母がひとり住んでいたことから、この家に移り住むことになったのである。そのため、上述の空襲には遭わず、命は助かったといえる。また、同じ街で、漁業の網元をしていた叔父とその家族に何かと世話になったことも忘れるわけにいかない。当時、都会では学童の集団疎開が行われていたが、父は我々に対して縁故疎開を選び、郷里の身寄りを頼って疎開させたものであった。富山に向かうについても、既に客車は少なくなり、貨車に人を乗せる状況になっていた。乗客が真っ暗な貨車の中で、数時間以上もじっと耐え忍ぶことになるが、そのうち何回か数十分にわたる停車時間があり、この時間に用を足すこともあった。疎開先の国民学校では、すでに入学式、始業式は済んでいたが、6年生の次姉とともに、私も1年生として編入が認められた。

疎開先は安全かといえば必ずしもそうではなかった。伏木港や新湊の漁港があり、米軍による機雷<sup>(5)</sup>の投下が行われていた。したがって、時折貨物船などが被雷していた。また、海に投下すべき機雷が誤って街中に落とされて、当時その町の有名人であった県会議員宅を直撃したこともあった。8月に入ってからはあったが（1~2日）、富山の空襲があり、遠く離れた新湊まで爆撃音が響き、火災により空が赤く染まっている様子が伺えた。

## 2-2 疎開先の国民学校での思い出

富山県新湊市の放生津国民学校には、上級生の下に隊列を組んで登校した。当時は男女別々に登校していた。校門入り口には奉安殿（ホウアンデン）があり、中に御真影（ゴシンエイ）<sup>(4)</sup>が飾られており、教育勅語（キョウイクチョクゴ）が奉納されていたという（写真1参照）。その前で最敬礼した後、各自教室に向かった。その当時は、二宮金次郎<sup>(5)</sup>の像も併置されていた。

式日には、校長が生徒の前で教育勅語を代読したが、ほとんどの生徒は、その意味を理解してなかったと思われる。

北杜夫の作品<sup>(6)</sup>に「夫婦相和し・・・」を「夫婦はイワシ」と聞いて、吹き出しそうになったと記している例もある。また、戦後になって、悪童が「朕（チン）想うに、腹減った、飯食わせ！御名御璽（ギョメイギョジ）」などとふざけていたことを思い出す。戦時中ならば、大変なことになったであろう。

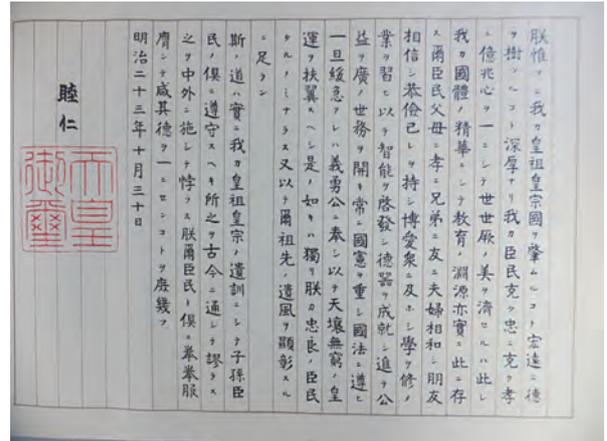


写真1. 教育勅語（宮崎神宮版）

都会から疎開して来た「よそ者」として、筆者は地元の子も達からは、疎外されているように感じるところがあった。また、近所に同級生がいなくて、一人で遊ぶことが多かった。近くに放生津八幡宮があり、社の裏が富山湾に面していた。夏は海辺で遊び、他の季節には境内で時間を過ごした（写真2参照）。近くに練兵場があった関係から、時折、境内で兵隊たちが訓練を受けていた。上陸用舟艇（ジョウリクヨウシュウテイ）の操作訓練もやっていたが、これが機雷に触れて犠牲者を出すこともあった。事故が起きると、社の浦に交替で兵隊が歩哨に立った。流れ着くものを、監視していたと思われる。



写真2. 放生津八幡宮の境内

当時、近くに潟（放生津潟）があって（現在は埋め立てられて工場などが進出している）、一人でシジミ採りに行ったことがある。沢山取れたので、数少ない思い出となった。また、街の主要産業が漁業であり、この海でハマチやブリが豊漁の時は、なんとなく街に活気があった様に思われた。

ところで、編入後一月ほど経った頃、担任の先生から各人に役割分担が命じられた。何故か級長を命じられて、授業の終始に際して、「気を付け！」「礼！」と号令をかけさせられた。しかし、時々この号令を忘れて、先生から皮肉られたこともあった。その年の夏休み（8月15日）に終戦となり、翌年3月に大阪へ転宅した。新湊には一年足らずの在住であったためか、印象に残った思い出は少ない（ただし、最近、新湊のことを扱った石橋冠監督『人生の約束』という映画をみて、懐かしさが蘇ってきた。撮影現場のいくつか、保存されている）。

### 2-3 当時の学校制度と教育内容

兄や姉が進学のことで、「〇〇が、陸軍士官学校に入ったとか、高等学校に合格した」という話を聞くともなく聞いていた。

この当時の学校制度は、一般の学生が歩むコースと、軍関係の学校があった。後者は、国民学校高等科より陸軍幼年学校に進む道があった。軍の学校は、月謝免除であり、上級校に進むには経済的に恵まれなくても、優秀であれば軍の学校には進学できた。また、中等学校から途中編入する者もいた。さらに、陸軍士官学校、陸軍大学へのエリート・コースも設けられていた。海軍にも海軍兵学校のほか、海軍経理学校や海軍機関学校があり、さらに海軍大学があった。また、海軍飛行予科練習生（通称予科練、ヨカレン）のように、飛行機の操縦に取り組む学校や、海軍短期現役主計科士官学校（通称短現、タンゲン）<sup>(7)</sup>などもあった。この当時、軍国少年にとっては、あこがれの学校であったかと思われる。

一方、国民学校と高等科以降の上級学校には、中等学校、商業学校、工業学校、農業学校などがあり、女子の場合高等女学校があった。さらに上級の学校として、旧制の高等学校があり、高等商業、高等工業、高等農林などが挙げられる。また、女子には女子専門学校があった。教師になろうとする人には、高等科から各地にある師範学校（予科）や中等学校から同（本科）に進む道があった。さらに上級には高等師範学校（東京高師・現在筑波大学、広島高師・現在広島大学）と

女子高等師範学校（東京女高師・現在お茶の水女子大学、奈良女高師・現在奈良女子大学）が、それぞれ2校存在した。国民学校には、師範学校を卒業した先生が多かったが、当時若い男性教師は出征して殆どいないことから、高等女学校の卒業生が代用教員となり、その後教員免許を取るという先生も珍しくなかった。高等師範出身者は、おもに中等学校や高等女学校で教鞭をとっていた。

旧制高等学校は、当時38校（外地にある台北、旅順高校、台北、京城にある帝大の予科などを含む。秦郁彦『旧制高校物語』p.36-37参照）あったが、入学試験は厳しいものが多かった。いったん入学出来ると、ほぼどこかの帝国大学（当時は9大学で、戦後は7大学となった。ただし、帝国の名は、その後削られている）に入学できた。高等学校への進学は、帝大への入学切符を得るような意味があったといえる。私立大学には予科があり、中等学校からの入学試験に合格すれば、受け入れられた。また、その後の成績次第で、大学に進学することができた。このように、当時の学校制度は、現在のそれとは大きく異なっている。特に、師範学校は、現在は教育系大学となり、教師になるための修業年数は戦前より増加している。また、女性が学べる上級学校である女子専門学校は、多くは戦後女子大学になったことや、一般大学が男女共学になったことから、今日では女子学生が大幅に増えている。

当時の人々の身なりは、戦闘帽、国民服、ゲートル<sup>(8)</sup>が一般的であり、女性はズボンやもんぺ姿が普通であり、非常時には、鉄兜（テツカブト）、防空頭巾（ボウクウズキン）が使用された。中等学校、高等女学校などでは軍事教練があり、隊列行進、銃剣術、匍匐前進（ホフクゼンシン）<sup>(9)</sup>、手旗信号、モールス信号などの演習があった。また男子は剣道、柔道、女子は薙刀（ナギナタ）の授業も行われていた。こうした教練の指導には、退役軍人が派遣されてこれに当たったが、威張るばかりで総じて評判は良くなかった。しかし、例外として旧制新潟高校での教練教師と学生との師弟愛について、書き遺されたものがある<sup>(10)</sup>。これなどは稀有の素晴らしい事例といえる。

なお、徴兵の命令は、赤紙<sup>(11)</sup>と称して一枚の通知が該当者に送付される。一方、軍需工場などに徴用される場合は、白紙の通知が届けられた。また、学徒動員は、それぞれの学校単位で勤務先や仕事が割り当てられた。なかには、松の根から航空機燃料にするための松根油（ショウコンユ）<sup>(12)</sup>を取り出す作業もあった。当時、空襲により動員先で被害にあう学生が多数出て

いた。なお、このほか女性の後方支援として、女子挺身隊（ジョシテイシンタイ）<sup>(13)</sup>があった。

#### 2-4 戦時下の食糧事情と生活

この頃の一般家庭では、配給制度があったものの十分な量が配られないため、人々は食糧難に苦しんだ。コメの換算で一日二合三勺（昭和16年4月に決定された。さらに、戦争末期の昭和20年7月には二合一勺に減じられた<sup>(14)</sup>）の配給とはいえ、コメの代わりに麦、イモ、コウリヤンなど代用食と称する食品が配られた。そのため、家族の飢えを納めるため、家庭内では野菜（ナス、キュウリ、大根など）のほか、イモ、ジャガイモ、トウモロコシ、カボチャなどが栽培されていた。ニワトリを飼って、卵を産むのが日々の楽しみにもなっていた（食用のためウサギを飼っていたという話も聞いたことがある）。禁じられてはいたが、近所の農家を訪れて、衣類や骨とう品などと、コメやイモとの物々交換も密に行われていた。こうした身の回り品を剥いで行く生活を、「タケノコ生活」<sup>(15)</sup>とも称されており、食糧確保の努力は各家庭で戦後になっても続けられていた。空襲に対する避難以外に、食糧の確保は、この頃の都会に住む親が最も苦労したところである。

当時、隣組制度（トナリグミセイド）<sup>(16)</sup>があり、貴金属類の供出など、隣近所が一緒になって行動することが求められていた。なお、協力者には軍から感謝状が届けられた（写真3参照）。



写真3. 供出協力者へ東條英機大臣からの感謝状

なお、隣組制度のもとで先程の食糧の配給以外に、当局からの連絡回覧のほか、消火・防火訓練、燈火管制（トウカカンセイ）などが強いられた。事と場合によっては、退役軍人や国防婦人会から嚴重な注意を受

けることもあった。隣組制度を賛辞する「トントントンカラリと隣組」という明るい歌も流行したが、運営の実態は陰湿な一面がみられた。隣組制度の結果、各家庭での人員構成や兵役などによる異動が全員に判る仕組みとなっていた。たとえば、出征する人がおれば、千人針（センニンバリ）<sup>(17)</sup>や簡素な壮行会の準備が隣組の下で行われていた。しかし、戦況の悪化とともに、隣組の活動も、益々簡略化されて寂しいものとなっていった。

空襲が激しくなると、各家庭では防空壕が掘られていたが、年寄りや子どもを田舎に疎開させる家庭が増えた。戦後になって、この疎開経験が多くの人に語られているが、幸せな経験ばかりではなかったことが伺える。語られている内容には、食糧が不足して、何時も空腹だったこと、親から離れて寂しかったこと、何事にも不自由だったこと、村や地元の人からよそ者扱いされたことなどが挙げられている。

#### 2-5 戦時中の憩い

当時は、ラジオが世間のことを知り得る重要な手段であった。特に、警戒警報に先んじて、B29 (Boeing 29 爆撃機) が、どのあたり上空を飛んでおり、どの方向に向かっているかを伝える臨時ニュースは、耳をそばだてて聞いていた。その内容によって、避難するとか、防空壕に入るか準備が必要となった。また、敵機が近づくと空襲警報が鳴り、速やかな避難が求められた。こうした情報を得るために、いつも家ではラジオがそばにあったように思う。戦争が深刻になるにつれて、音楽といえば軍歌が主流となり、欧米（ドイツ、イタリアを除く）の音楽は、いち早く禁じられていた。浪曲、歌謡曲や童謡なども流されていたが、これらも時代に沿ったものが選ばれ、曲目にも検閲が入ったと聞く。

今日では浪曲ファンは少なくなったが、当時はラジオから流れてくる浪曲のメロディーを聞くとともに聞いていたように思う。歌謡曲も当時支配下にあった満洲、中国、南洋に関する歌が多かった。たとえば、「麦と兵隊」、「満州娘」、「国境の町」、「上海の花売り娘」、「何日君再来（中国語、ホーリチンツァイライ）」、「蘇州（ソシュウ）夜曲」、「南の花嫁さん」、「酋長（シュウチョウ）の娘」などである。また、出征兵士を送る気持ちを歌った「明日はお立ちか」も流行した。軍歌は、古いものからその時点のものまで多数作られており、国民学校の唱歌に取り込まれたものは、広く人々に歌われた。日清戦争、日露戦争の経験から作られた「敵は

幾万」、「雪の進軍」、「日本陸軍」、「広瀬中佐」、「水師営（スイシエイ）の会見」、「戦友」、「軍艦行進曲」などが有名であった（これらは軍歌でもあり、また唱歌として子供たちが習ったものがある）。昭和になってからの作品には、「出征兵士を送る歌」、「暁に祈る」、「露営の歌」、「日の丸行進曲」、「若鷺の歌」、「同期の桜」、「ラバウル海軍航空隊」、「愛国行進曲」、「紀元二千六百年」などが挙げられる（軍歌および戦時歌謡については表2を参照されたい）。

子どもの歌う唱歌や童謡には、戦中はもとより、戦後においても歌い継がれていたものが多い。文部省唱歌として、音楽教育の一環として編纂された教科書にあるものが、その後も引き続き歌われていたものといえる。特に、明治期に採用された欧米の歌が、その後も人々に歌い継がれてきた。たとえば、蝶々（スペイン民謡）、むすんでひらいて（ルソー作曲）、蛍の光（スコットランド民謡）、庭の千草（アイルランド民謡）、故郷の空（スコットランド民謡）、埴生の宿（ビショップ作曲）、灯台守（イギリス民謡）、七里ヶ浜の哀歌（ガードン作曲）、旅愁（オドウェイ作曲）、故郷の廃家（ヘイス作曲）、野なかの薔薇（ウエルナー作曲）、ローレライ（ジルヘル作曲）、シューベルトの子守唄（シューベルト作曲）、モーツァルトの子守唄（フリース作曲・野ばら社「唱歌」p.195参照）、春風（フォスター作曲）などがあった。

唱歌の中には、当時の世相を反映したものがある。たとえば、紀元節、元寇（ゲンコウ）、天長節、一月一日、金剛石、桜井の訣別、箱根八里、荒城の月、大こくさま、青葉の笛、二宮金次郎、児島高德（コジマタカノリ）などが挙げられる（これらの唱歌については、表3にまとめて記したので参照されたい）。

童謡にも、今日まで歌い続けられているものが多数ある。お正月、雨、背くらべ、浜千鳥、てるてる防主、しゃぼん玉、夕日、どんぐりころころ、赤い靴、七つの子、黄金虫（コガネムシ）、肩たたき、月の砂漠、夕焼小焼、兎のダンス、雨降りお月、靴が鳴る、春よ来い、あの町この町などは、明治・大正時代の歌であった。戦前の昭和時代の童謡には、仲よし小道、たきび、南京言葉、まりと殿様、こいのぼり、里の秋、かわいい魚屋さん、かもめの水兵さん、赤い帽子白い帽子、リンゴのひとりごと、船頭さん、カラスの赤ちゃんなどがあった。

なお、戦争が拡大し、かつ戦況が厳しくなってきた頃、英米に端を発するものは、基本的に我が国流に変更されるようになった。

たとえば、音階が欧米の音符表示であるとのことで、

「ドレミファソラシド」から「ハニホヘトイロハ」となった。芸能人の芸名においても、ディック・ミネは、三根耕一と、バッキー白片は、白方力と変えて活動していた。野球用語も、「ストライク」は「よし」と変更された。「三振アウト」は「よし それまで」、「アウト」は「ひけ」などとなった。しかし、戦況が悪化してくると、野球試合そのものが禁止された。子どもの遊びも、戦争が激しくなると外で遊ぶことが次第になくなってきた。しかし、戦争ごっこ、チャンバラごっこ、馬とび、陣取りなどは覚えている。

当時、五族協和（五族とは日本人、漢人、朝鮮人、満洲人、蒙古人）を目指す軍部では、甘粕正彦理事長の満洲映画協会（通称満映）により国策映画の普及に努めた時期があった<sup>(18)</sup>。その頃の長谷川一夫（俳優、1908-1984）と李香蘭主演の映画が日本でも人気を集め、彼女の歌も流行した。多くの日本人は李香蘭を中国人と思っていた節がある<sup>(19)</sup>。彼女は、じつは日本人であり、山口淑子として戦後参議院議員になって活躍した。一方、同じ頃活躍した川島芳子は清王朝における親王家の王女であり満州人であった<sup>(20)</sup>。清朝を再興することを願っていたが、満蒙独立運動で日本および関東軍との関係を深めて、その政治・諜報活動（チョウホウカツドウ）に参画していた。一時期、「男装の麗人」として人々に持てはやされた時代もあった。川島芳子と山口淑子二人は、「ヨシコ」どうしということ、ある時期交友があったが、川島の立ち振る舞いに疑問を持った山口淑子は、次第に彼女と距離を置くようになったと述べている（山口淑子、藤原作弥『李香蘭 私半生』文献番号101参照）。なお、終戦により、山口淑子は日本人であることが証明されて、無事帰国したが、川島芳子は、現地で捕えられ、裁判を経て「漢奸（カンカン）」として銃殺された。また、甘粕正彦は終戦後自決した。

戦争中は各地の軍隊に慰問団が派遣された。多くの歌手や、俳優が戦線にいる兵隊の慰問を行っていた。こうした人たちには、淡谷のり子、渡辺はま子、藤山一郎、霧島昇をはじめ多数挙げられる<sup>(21)</sup>。慰問に訪れると、勇ましい軍歌はさることながら、平和な時代に歌った自分たちの持ち歌も披露することがあった。「今どき、そのような軟弱な歌はけしからぬ」と否定されるかと思われたが、軍の将校は、見て見ぬふりをしていたという。「聞いていた兵隊のほとんどが涙を流していた」と、戦後、淡谷のり子は話している。このことから、彼らの生活が日々辛いものであったこ

表2 明治・大正・昭和時代の主な軍歌と戦時歌謡

曲名	作詞・作曲者	最初の歌詞
明治・大正時代の軍歌		
敵は幾万	山田美妙斎・小山作之助	敵は幾万 ありとても
凱旋	佐々木信綱・納所弁次郎	あな嬉し喜ばし たたかい勝ちぬ
婦人従軍歌	加藤義清・奥好義	火筒の響き遠ざかる
勇敢なる水平	佐々木信義・奥好義	煙も見えず雲もなく 風も起こらず
雪の進軍	永井建子(詞・曲とも)	雪の進軍氷を踏んで どこが河やら
日本陸軍	大和田建樹・深沢登代吉	天に代りて不義を討つ 忠雄無双の
橋中佐	鍵谷徳三郎・安田俊高	遼陽城頭夜は更けて 有明月の影
戦友	真下飛泉・三善和気	ここは御国の何百里 はなれて遠き
歩兵の本領	加藤明勝・永井建子	万朶の桜か襟の色 花は吉野に
軍艦行進曲	烏山啓・瀬戸口藤吉	守るも攻めるもくろがねの
昭和時代の軍歌と戦時歌謡		
麦と兵隊	藤田まさと・大村能章	徐州徐州と 人馬は進む
加藤隼戦闘隊	田中林平・岡野正幸ほか	エンジンの音轟々と 隼は征く
空の神兵	梅木三郎・高木東六	藍より蒼き 大空に 大空に
空の勇士	大槻一郎・蔵野今春	恩賜の煙草 いただいて
暁に祈る	野村俊夫・古関裕而	あゝ あの顔で あの声で
露営の歌	藪内喜一郎・古関裕而	勝って来るぞと 勇ましく
討匪行	八木沼丈夫・藤原義江	どこまで続くぬかるみぞ
国境の町	大木惇夫・阿部武雄	櫓の鈴さえ 淋しく響く
満州娘	石松秋二・鈴木哲夫	私十六満州娘 春よ三月雪解けに
軍隊小唄	一・倉若晴生	いいじゃありませんか 軍隊は
若鷺の歌	西條八十・古関裕而	若い血潮の予科練の 七つボタンは
同期の桜	西條八十・大村能章	貴様と俺とは 同期の桜
月月火水木金金	高橋俊策・江口夜詩	朝だ夜明けだ 潮の息吹
上海便り	佐藤惣之助・三界稔	拝啓御無沙汰しましたが 僕も益々
上海の花売娘	川俣栄一・上原げんと	赤いランタン ほのかにゆれる
何日君再来	長田恒雄・劉雪庵	忘れられない あの面影よ
太平洋行進曲	横山正徳・布施元	海の民なら男なら みんな一度は
南の花嫁さん	藤浦洸・任光	合歓の並木を お馬の背に
ラバウル海軍航空隊	佐伯孝夫・古関裕而	銀翼連ねて南の前線 揺るがぬ護りの海鷲たちが
ラバウル小唄	若杉雄三郎・島口駒夫	さらばラバウルよ また来るまでは
出征兵士を送る歌	生田大三郎・林伊佐緒	わが大君に 召されたる 生命光栄ある朝ぼらけ 讃えて送る 一億の
愛国行進曲	森川幸雄・瀬戸口藤吉	見よ東海の空あけて 旭日高く
紀元二千六百年	増田好生・森義八郎	金鷄輝く日本の 栄えある光
ああ紅の血は燃ゆる	野村俊夫・明本京静	花もつぼみの若桜 五尺の生命ひっさげて
父よあなたは強かった	福田節・明本京静	父よあなたは強かった 兜も焦がす炎熱を
日の丸行進曲	有本憲次・細川武夫	母の背中にちさい手で 振ったあの日の日の丸が
隣組	岡本一平・飯田信夫	とんとん とんからりと 隣組
男なら	西岡水朗・草笛圭三	男なら男なら 未練残すな昔の夢に
明日はお立ちか	佐伯孝夫・佐々木俊一	明日はお立ちか お名残り惜しや
九段の母	石松秋二・能代八郎	上野駅から 九段まで
海ゆかば	(大伴家持)・信時潔	海ゆかば 水漬くかばね

注 辻田真佐憲『日本の軍歌』、キングレコード『軍歌・戦時歌謡』など参照。

表3 戦時中の主な唱歌（明治・大正・昭和20年まで）

曲名	発表年	作詞・作曲者	最初の歌詞
紀元節	(M21)	高崎正風・伊沢修二	雲にそびゆる高千穂の 高根おろしに
元寇	(M25)	永井建子作詞・作曲	四百余州をこぞる 十万余騎の敵
天長節	(M26)	黒川真頼・奥好義	今日の良き日は 大君の 生まれたまいし
一月一日	(M26)	手塚尊福・上真行	年のはじめの ためしとて 終りなき世の
港	(M29)	旗野十一郎・林柳波補作・吉田信太	空も港も 夜ははれて 月に数ます 船のかげ
金剛石	(M29)	昭憲皇太后・奥好義	金剛石も みがかずば たまの光は
桜井の訣別	(M32)	落合直文・奥山朝恭	青葉しげれる桜井の 里のわたりの
きんたろう	(M33)	石原和三郎・田村虎蔵	まさかりかついで きんたろう
ももたろう	(M33)	田辺友三郎・納所弁次郎	ももから生まれた ももたろう 気は優しくて 力もち
うらしまたろう	(M33)	石原和三郎・田村虎蔵	むかしむかし うらしまは こどものなぶる かめをみて
箱根八里	(M34)	鳥居忱・滝廉太郎	箱根の山は 天下の険 函谷関も
荒城の月	(M34)	土井晩翠・滝廉太郎	春高樓の 花の宴 めぐる盃 かげさして
一寸法師	(M38)	巖谷小波・田村虎蔵	指に足りない 一寸法師 小さい体に
大こくさま	(M38)	石原和三郎・田村虎蔵	おおきなふくろを かたにかけ
青葉の笛	(M39)	大和田建樹・田村虎蔵	一の谷の いくさ破れ 討たれし平家の
春が来た	(M43)	高野辰之・岡野貞一	春が来た 春が来た どこに来た
水師營の会見	(M43)	佐々木信綱・岡野貞一	旅順開城約なりて 敵の將軍ステッセル
牛若丸	(M44)	作者不詳	京の五条の橋の上 大のおとこの弁慶は
二宮金次郎	(M44)	作者不詳	柴刈り縄ない草鞋をつくり 親の手を助け
汽車	(M45)	作詞不詳・大和田愛羅	今は山中 今は浜 今は鉄橋 渡るぞと
茶摘	(M45)	作者不詳	夏も近づく 八十八夜 野にも山にも
村祭	(M45)	作詞不詳・南能衛	村の鎮守の神様の 今日 はめでたい御祭日
春の小川	(T1)	高野辰之・岡野貞一	春の小川は さらさら流る 岸のすみれや
村の鍛冶屋	(T1)	作者不詳	しばしも休まず つち打つひびき
広瀬中佐	(T1)	作者不詳	とどろく砲音とびくる弾丸 荒波あろう
鯉のぼり	(T2)	作者不詳	いらかの波と雲の波 重なる波の中空を
海	(T2)	作者不詳	松原遠く消ゆるところ 白帆の影は浮かぶ
朧月夜	(T3)	高野辰之・岡野貞一	菜の花畠に 入日薄れ 見わたす山の端
故郷	(T3)	高野辰之・岡野貞一	うさぎ追いしかの山 小鮎つりしかの山
児島高德	(T3)	作詞不詳・岡野貞一	船坂山や杉坂と 御あとと慕いて院の庄
浜辺の歌	(T7)	林古溪・成田為三	あした浜辺を さ迷えば 昔のことぞ
とんび	(T8)	葛原しげる・梁田貞	飛べ飛べとんび空高く 鳴く鳴くとんび
時計台の鐘	(S2)	高階哲夫作詞・作曲	時計台の 鐘がなる 大空とおく
こいのぼり	(S6)	教育音楽会	屋根よりたかい こいのぼり
兵隊さん	(S7)	作詞不詳・信時潔	鉄砲かついだ 兵隊さん 足並み揃えて
牧場の朝	(S7)	杉村楚人冠・船橋栄吉	ただ一面に立ちこめた 牧場の朝の
椰子の実	(S11)	島崎藤村・大中寅二	名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る
電車ごっこ	(S16)	井上赳・下総皖一	運転手は君だ 車掌は僕だ あとの四人
花火	(S16)	井上赳・下総皖一	どんとなった 花火だ きれいだな
若葉	(S17)	松永宮生・平岡均之	あざやかな みどりよ 明るいみどりよ
スキー	(S18)	時雨音羽・平井康三郎	山はしろがね 朝日を浴びて

注 ・野ばら社編集部『唱歌』野ばら社、1994 参照。

・発表年は、Mは明治、Tは大正、Sは昭和の略。M26は明治26年を示す。

とが伺われる。また、兵隊たちの中で、芝居や芸能に覚えのある有志による芸能大会が、部隊内の士気高揚に大いに役立ったことが伝えられている。とくに、加藤大介が所属した部隊での演劇披露における苦労話は、胸を打つものがある<sup>(22)</sup>。殺風景な兵隊生活がしのばれよう。

こうした話は、当時の大人（海外からの帰国者、兵隊から復員してきた人など）から、聞かされることがあった。

### 3 戦後の世相

#### 3-1 終戦後の国民学校

玉音（ギョクオンまたはギョクイン）放送<sup>(23)</sup>があった日（8月15日）は暑い日であった。ラジオの音声が聞き取りにくいものであったが、戦争に負けたことだけは理解できた。これからどうなるか不安もあったが、遠からず家族一緒に暮らせるのではないかと、淡い希望のようなものが感じられた。

一年足らずの疎開生活は終わったが、兄は京都で下宿生活を続けていた。今津網引町の家は空襲により焼失したため、当時の大阪府豊能郡小曾根（オゾネ）村大字長島（現在の豊中市豊南町）に家族が揃うことになった。しかし、食糧難は一層深刻さを増しており、近郊の農家では、食糧買い出しの人々が増加し、いい品物がないと物々交換に応じてもらえなくなってきた。母はこのため遠方まで出かけて、買い出しに努めていたが、時折、警官による持ち物検査があり、買ってきたものを没収されることもあった。「子どもに食べさせるために買ってきたものだ」と説明しても、聞いてもらえなかったという。

転居後、筆者は地元の国民学校（現在の豊中市立豊南小学校）に転入することになった。次姉は、すでに新湊の県立高等女学校に入学を許可されていたが、大阪での転校先を探すことになった。結局、長姉が在学していた縁で、私立神戸女学院の中等部に入学が認められ、通学することになった。

ところで、筆者の通学する国民学校では、校舎が空襲で焼失しており、学年ごとに最寄りの寺、神社、会社などの施設を借りて、バラバラに分散した形で授業が行われていた。教室に代わる施設の無いところでは、青空教室（外の広場などで授業）が開かれていたと聞く。われわれの学年は「T刃物」という会社の一室を借りて、二部授業を行っていた。つまり、一組が午前中の授業を受けると、二組は午後の授業となり、翌週は午前と午後を交代する仕組みであった。机がないの

で、各家庭からミカン箱を持ち込み、色紙を張るなど多少の装丁を施して、これに代えていた。教科書がなく、謄写版（トウシャバン）で刷った藁半紙（ワラバンシ）が配られ、それを教材として使用した。上級生は、従来の教科書の不適箇所について、墨で塗りつぶす作業を行っていたという。また、男女共学であったことが印象に残っている。こうした二部授業は三年生まで続いた（なお、国民学校は、その後、尋常（ジンジョウ）小学校となり、三年生になると小学校となった）。途中で応急的なバラック建ての校舎が建ち、各学年が一堂に揃うことになった。しかし、窓ガラスは無く、油紙を張ったような窓であった。つまり、窓のガラス越しにものを見ることはできなかった。朝礼があり、全校生徒が始めて整列したが、男性教師の中に、まだ兵隊服を着用している人もみられた。

4年生になってようやく学校らしい校舎が建築された。給食も始まり、脱脂ミルクが毎日配られたが、腹の空いている割に、このミルクを飲もうとする生徒は少なく、評判は悪かった。まだ給食が無かった時期には、昼食を家まで食べに帰っていた。なぜなら、弁当になる食材が無かったためである。イモやカボチャでは、弁当の体を成さないため、家に帰って、ありあわせの食事を済ませた後、昼からの授業に間に合うように大急ぎで帰校していた。農家の子弟は、「銀シャリ」<sup>(24)</sup>の詰まった弁当を持参しており、悠々と食事をとっているのを横目で見ながら家路を急いだものである。しかし、後になって分かったことであるが、家に帰っても食べるものがない児童もおり、校舎の片隅で昼休みの終わるのをジッと待つ者がいたとのことである。給食が始まるようになり、この子たちのうれしそうな顔をみて、「そうだったのか」と分かったことであった。また、学校での仲間との話の中では、「ザリガニ」をいっぱい取って、思いきり食った話や、「イナゴ」を食べた話、柿泥棒をした話など、この頃は食の話題が多かった。

学校の周囲にはまだ田畑が残されており、あぜ道を通って通学していたが、時折蛇が出てきて驚くこともあった。爆弾が落ちた跡に池（通称爆弾池）が出来ており、夏にはプール代わりに泳ぐ子どももいた。鬼ごっこで、勢いあまって肥（コエ）溜めに落ちた仲間がいて、大騒ぎになったことがある。小川で体を洗う以外に施しようがなかった。本人には悪いが、あの時の臭気と、糞（クソ）まみれのおぞましい姿は忘れられない。この当時、農家では、人糞（ジンプン）を肥料に使っており、人家を訪れて便所の汲み取りを行った後、

畑の肥溜めにたくわえていたことになる。当時の一般家庭では、水洗便所になっていない家が多かった。人糞の汲み取り桶を積んだ牛車が、街中を悠々と進む光景を見かけたものである。

当時、時々「物資の特配」が行われた。クラスで一人か二人しか恩恵に浴さなかったが、運動靴や傘のようなものが、くじ引きで当たるといふ仕組みであったと思う。当たった子どもは喜んでいて、何故なら、多くの子供は、下駄（ゲタ）や藁草履（ワラゾウリ）をはいて、学校に来ていたので、靴などは珍しかったといえる。また、当時は現在のように鉛筆削り器などはなく、みんな「肥後の守（ヒゴノカミ）」のような小刀を所有していた。鉛筆を使っていると、次第に短くなってくるが、出来る限り使用するために、「継ぎキャップ」を用いたことも覚えている。

ある年の運動会では、現在のように運動会当日の給食は無く、当時は、各家庭で弁当と若干のお菓子・果物を子供に持参させる風習があった。昼の休憩時間になって、大八車（ダイハチグルマ）をせわしなく引いてきた男が、運動場に入ってきて自分の子どもを探していた。やがて見つけたわが子に、「オイ ×× これ食べ！ 食べ！」と柿を二つ三つ与えている光景を目にした。仕事が忙しく、子どもに十分な食べ物を持たせることができなかつた親が、仕事の合間にやって来たと思われる。その子が、「ヤギ」のようにやさしそうな目をしていたのを今も覚えている。当時、裕福な家庭の子どもは別にして、小学校卒業後、大多数が地元の公立中学校に進学したが、どうしてか、その子の姿を目にする事はなくなった。

しかし、運動会そのものは熱気にあふれており、騎馬戦（キバセン）や棒倒しなど校内全体が一つになって盛り上がった。学年対抗や紅白対抗リレーは、みんな声を振り絞って応援した。この時だけは、駆けてこの速い子どもの天下であった。

### 3-2 食糧難と貧しい生活

食べ物の不足時代が続いたが、そのせいか不思議な名前を覚えている。「農林一号」というサツマイモのひとつの品種である（他に水稻、馬鈴薯（パレイショ）にもこの名が付けられていた）。このイモは、大きく成長するので、代用食に用いられたが、あまりおいしくなくて、飽きが来たものである。また、「カルメラ焼き」という砂糖を熱して溶かしたあと、重曹（ジュウソウ）で膨らませるお菓子があつた。杓子（シャクシ）で作るが、うまくできる場合と、失敗する時があつた。

菓子が無い時代の貴重品といえた。なお、甘いものがない時代に、「サッカリン」や「ズルチン」という甘味料があり砂糖が出回るまでは、貴重なものであつた。

いまでは見られないが、当時「簡易パン焼き器」なるものがあつて、メリケン粉などを溶いて、同器に流し込み、陰極と陽極をその中に差し込んで電気を通すと、やがてパンが出来上がるという道具であつた。ある時、母の代わりに食糧を運ぶため、中学生の次姉と2人で、京都の百万遍にあつた兄の下宿を訪れた。喜んで兄は、この道具でパンを焼いてくれた。3人で食べるささやかな昼食であつたが、当時の兄ができる精一杯のもてなしといえた。それだけで、妹（次姉）、弟に対する兄の気持ちが、十分に伝わるものであつた。対話の中で、隣の下宿に、「ピカピカの短靴をはいて、すっきりした背広を着た若者がいる。最近まで会社勤めの若者と思つていたが、実は同志社の学生であることが分かつた」と話していた。「あるところにはあるものだ」とつくづく感心していた。当時の兄は、擦り切れた学生服に、兵隊靴を履いていたことから頷ける。

食べ物だけでなく、衣服も無かつた。兄弟がいる家では「お古」があつたが、家が空襲で消失した家庭では、それどころでなかつた。「着たきり」の服を何年も着た。栄養が十分でないため、冬には洩（ハナ）を垂らすものが多く、ハンカチもないので袖がピカピカに光っている者もいた。このころ、「スフ」(staple fiber)という代用繊維の学生服もあつたが、あまりいい評判は聞かなかつた。しかし、これを買ってもらうだけでも、大変なことであつた。散髪にも行けない生徒がいて、髪形がまるで「山賊のような姿」になるのを見かねた先生が、バリカンでこうした子供の頭を刈っている光景もみた。

進駐軍の兵隊がきて、生徒を運動場に並ばせ「ノミ」、「シラミ」を駆除するために、首筋から殺虫剤 DDT (dichlorodiphenyltrichloroethane)<sup>(25)</sup> を吹きかけた記憶がある。女子は髪にもかけられて、頭全体が真白になっている子もいた。その当時、世間では不衛生な状態が続き、発疹チフスなどが流行したため、防疫の観点からの米軍の行為であつた。このほか、回虫のいる子どもが多く、学校で検便が行われた。便をマッチ箱に入れて学校に持参するが、忘れたものは、学校のトイレで採ることになる。入れるものがないので困っている者がいた。また、回虫がいると分かつると、「サントニン」という薬を飲まされていた。この時代大人には肺結核を病む人が多かつた。これも栄養失調が原因の一つと

考えられた。「ストレプトマイシン」や「パス」などの薬がほどなく使用されるようになり、効果を上げることになった。

### 3-3 新しい教育制度

終戦とともに教育制度が大きく変化した。帝国主義から民主主義への転換に依存したものであった。昭和21年3月アメリカ教育使節団の勧告により、新しい学校制度として、六・三・三・四制の実施が決まった。昭和22年4月より新制度が採用されている。当時、制度が定着するまで、教科書から不適切な表現や文言は、削除または抹消しなければならなかった。生徒も困惑したが、教師も大変な苦労があったと思われる。いままでの教育体系が全く異なるものに改変されたからである。制度の改革だけでなく、軍関係の学校は閉鎖された。これらの学校の在籍者は、一般の学校に転校、転籍することになった。また、海外にあった学校も同様な運命にあったことから、帰国した学生・生徒は、国内でそれぞれの道を歩んでいる。陸軍士官学校や海軍経理学校に在籍していた学生が、再試験を経て旧帝大や旧商科大に入学するほか、上海の東亜同文書院<sup>(26)</sup>から旧帝大に入るなど、国内の各大学に入り直す事例を多数聞くことができた。なお、満州や海外にあった大学と高等専門学校は、閉校にあたり多くの教師や学生が犠牲になった。この事例について、たとえば三浦英之『五色の虹』や芳地隆之『ハルビン学院と満州国』を参照されたい(文献番号36,37)。また、幼年学校や予科練なども在籍年数を考慮して、国内にある一般の学校への編入が行われていた。旧制高等学校が無くなり、新制大学または総合大学に編成替えになるなど、大きな変化があった。旧制度のまま卒業するか、新制度になって卒業するかなど、制度の変革期に当たる学生には、悩ましい問題があった。旧制の高等専門学校は、多くは新制大学となり、大学数が一挙に増加することになった。戦後の混乱期における大人の会話で、こうした制度変更の話をよく聞かされていたが、本当のところ成人するまで、あまり理解できなかった。また、社会人になって、先輩から過去の学制変更時の混乱について、聞かされることがあった。さらに、上記のような軍関係や、海外の学校から転校した経験者本人からも、当時の苦労話を聞く機会があった。

なお、兄の学友で、戦時中に、台湾、中国からの留学生がいたが、2～3度我が家にも遊びに来ていた。戦後、卒業して祖国にそれぞれ帰国したが、中国の文

化大革命に遭遇し、現地にいたたまれなくなって、また日本に戻ってきた人がいた。某元有力者の姻戚にあったが、これが災いしたのではないかと聞かされた。

### 3-4 終戦後の社会風景

つい先ごろまで、米国は憎き敵国であったが、終戦後あつという間に、世間のあこがれの国になったことが不思議に思えた。進駐軍のMP (military police) がジープでやってきて、子どもたちにガムやチョコレートをくれてやる姿は、私も見たことがある。お菓子などまだ無い時代に、こうした振る舞いは、子どもたちにとって、非常に格好良く見えた。とくに、進駐軍が使用するジープ以外に、乗用車のフォードやクライスラーは、日本の木炭車(モクタンシャ)、三輪トラック、牛車、代八車、リヤカーとは比較にならないほど素晴らしく思えた。しかし、いいことばかりではなく、若い日本人女性(街娼と思われる)と腕を組んで歩く兵隊たちの姿が、やがて巷間で見られるようになった。

子ども達の間では、にわかに野球が盛んになった。つい先ごろまで、軍国少年だった子どもたちは、一気に野球少年になってしまった。道路でキャッチボールするものや、三角ベースの野球、ワン・バウンド野球、ゴロ野球など子どもたちは次々にアイデアを持ち込んで楽しんでた。一学年上にいた坂崎一彦さん(1938-2014, 浪商から巨人、東映選手として活躍)は、野球に関して子どものころから目立った存在だった。なお、当時は、放課後毎日、暗くなるまで野球を楽しんだことを思い出す。現在のように塾などへ行く子どもは誰もいなかった。裕福な家の子が買って来た一本のバットで、敵も味方もこれを使って遊んだ。グローブ(ほとんどが布製であった)を持っている子が少ないので、外野では素手(スデ)で守っていた。また、野球のユニフォームを買ってもらった子供が、これを毎日着て登校していたことも思い出す。

この当時、戦前の職業野球がプロ野球として蘇り、一気に花が咲いたように感じられた。復員してきた元職業野球選手や学生野球のOBたちが参加するようになり、この中で一躍スターになった選手もいた。なかでも、赤バットの川上、青バットの天下、長尺バットの藤村選手たちが有名であった。投手では、スタルヒン、若林、別所などの選手が人気を博した。「へそ受け」の名手として当時の阪急にいた山田伝選手(1914-1987, 日系二世)も、子どもに人気があった。さらに、当時の阪神タイガースのダイナマイト打線は、子ども心を捉えるものがあった<sup>(27)</sup>。

また、中等学校野球大会も復活し、平古場昭二投手（1928-2007、浪商一慶応一鐘紡）のいた浪華商業が、戦後最初の大会での優勝校となった。その後、全国高等学校野球大会として受け継がれ、今日では、さらに人気を集めるようになってきている。

こうしたなかで世の中が少しずつ落ち着きを見せるようになると、子どもたちの遊びも多様性を見せるようになってきた。たとえば、ベツタン（別名めんこ）、ラムネ（別名ビー玉）だけでなく、缶けり、輪まわし、竹馬、竹トンボも流行った。女の子は、縄跳び、ゴム跳び、マリつき、おじゃみ（別名お手玉）、あやとりをしていた。夏になると、家の前に床机（ショウギ）を出して、将棋や線香花火を楽しんだ。正月には、凧揚げに夢中になった。女の子は、羽根つきをしていた。なお、12月には、サンタクロースからプレゼントがあるというクリスマス会を心待ちしたほか、正月用の餅つき大会が町内で開かれて、威勢のいい音を楽しんだことを覚えている。

紙芝居のおじさんから、飴玉、するめなどを買うようになった。毎回は買えないので、ただで後方から見ることもあった（ただ見と称した）。夏にはアイスキャンデー売りが、町内を回ってきた。イモ飴やトコロテン、ハッタイ粉など菓子代わりのものも売られるようになった。

なお、昭和21年ごろから数年にわたり、進駐軍将校が日本の主に洋館住宅を接收し、自分たちの住宅として使用した時期があった。日本人が驚いたのは、彼らが夫婦そろって自家用車を持っていること、さらに電気冷蔵庫・掃除機・洗濯機などを日常使っていたからである。まだまだ、日本人には自家用車を持っている家庭は少なかった。電気製品に至っては、電熱器はあったものの、白物家電にあたる製品は、ほとんどの日本家庭では未使用であった。当時の日本家庭では、氷を用いた冷蔵庫、掃除はハタキと箒（ホウキ）、洗濯は洗濯板とタライを使用していた。一般家庭の生活レベルにおいても、その豊かさにおいて、米国とは格段の差があったことを、日本人は改めて思い知った。

また、海外で居住していた人々と、戦地にいた兵隊の帰国が進められた。無事にたどり着いた人は、幸せといえる。ソ連軍による略奪など厳しい経験をした人も多く、樺太（カラフト）・真岡では、侵略してきたソ連兵に対して、最後まで務めを果たした女性電話交換手達（9名）<sup>(28)</sup>が、全員自決した記録がある。このほか、シベリアへ抑留され過酷な労働を強いられた人も多い<sup>(29)</sup>。したがって、戦後、無事帰国できた人々や、

舞鶴に復員してきた人たちの悲喜こもごもの話は、いまでも多くの人に語り継がれている。また、悲惨な経験、苦難の旅について自身の記録を公にした書も多い<sup>(30)</sup>。これらを読んでいると、戦争の無惨なことと併せて、平和の尊さが、よく理解できる<sup>(31)</sup>。なお、戦後しばらくNHKラジオで「尋ね人」の時間があった。行方不明の人々を探す番組であったが、戦争の傷跡が深いことを物語っていた。

こうしたなかで、新しい時代の幸せを願う気持ちが世間に表れるようになってきた。歌謡曲で「りんごの歌」は、その先駆けとなった。平和や明るい世の中の実現を願う「長崎の鐘」、「憧れのハワイ航路」、「青い山脈」<sup>(32)</sup>などが流行した。また、復員兵を慰め、激励する歌も時代を反映していた。たとえば、「かえり船」、「異国の丘」、「シベリア・エレジー」、「ハバロフスク小唄」などがあった。従来の日本の歌謡曲にないリズム曲として、田端義夫の「街の伊達（ダテ）男（別名ズンドコ節）」や笠置シズ子の「東京ブギウギ」も流行した。

進駐軍の影響もあって、ジャズ、カントリー・ウェスタン、ハワイアン等が一気に流行りだすとともに、社交ダンスが若者の間で、人気を博した。すでに軍歌は、公の場では聞けなくなったが、例外として傷痍軍人（ショウイゲンジン）が、繁華街やお祭りの日の路上でアコーディオンを弾きながら歌っているのを見かけた。本来、軍歌は人々の気持ちを高揚させる歌が多いはずであったが、なんとなく寂しく聞かれたのは、その風体と演奏に依存していたかと思われる。

この頃のラジオ番組は絶大な威力を発揮していた。連続ドラマの「鐘のなる丘」は、戦争孤児を題材にした番組であり、子供だけでなく当時の大人の間でも多くのファンがいた。この主題歌は、「緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台・・・」とみんなが歌っていた。NHKの番組で、平川唯一の「英会話教室」は、人気があり、「証城寺の狸囃子（タヌキバヤシ）」の旋律を使った「カムカム エブリボディ・・・」の曲で始まったが<sup>(33)</sup>、子どもたちもこの歌を口ずさんでいた。このほか「のど自慢素人音楽会（現在NHKのど自慢）」、「二十の扉」や「とんち教室」なども子どもに人気があった<sup>(34)</sup>。世の中は次第に落ち着いてきたように思われた。

### 3-5 多くの犠牲を払った戦争

この戦争により、兄弟の中で、最も厳しい場面に遭遇したのは先述の長姉であり、兄は京都に居て空襲に

対する不安は無かったといえる。したがって、兄、次姉、私の三人は空襲により逃げ惑うという経験はしなかった。しかし、B29 や艦載機（カンサイキ）<sup>(35)</sup> が襲来の度に怯えていた。

空襲警報が鳴り、しばらくして B29 の独特の爆音が近づいてくると<sup>(36)</sup>、今にも爆弾が落とされるのではないかと、恐怖におののいていたものである。一体どうしてこんな戦争をしなければならないのか、子ども心に単純な疑問を有していた。

振り返ってみると、昭和 16 年 12 月のハワイ真珠湾攻撃が米軍に大きな打撃を与えたものの<sup>(37)</sup>、昭和 17 年 6 月のミッドウエー海戦では、日本海軍は立ち直ることのできないほどの被害を被っていた。このことについて国民には詳細が報じられなかった。さらにこの戦い以降ガタルカナルの撤退（昭和 17 年 12 月）、アッツ島での玉砕（同 18 年 5 月）、インパール作戦の失敗（同 19 年 7 月）、サイパン島の玉砕（同 19 年 7 月）、テニアン島の玉砕（同 19 年 8 月）、グアム島の守備隊玉砕（同 19 年 8 月）、硫黄島の玉砕（同 20 年 3 月）など連戦連敗が続いた。特に、サイパン島が落ちてから、同島から飛び立つ B29 の爆撃が激しくなり、主要都市は連日の如く破壊され、多くの人々が犠牲になった。更に沖縄での悲惨な戦いにより守備隊は全滅し、一般人も含めて 20 万人の犠牲者を出している（昭和 20 年 6 月）。このような事態になっても、軍部は何の手だてもできなかった<sup>(38)</sup>。この頃の特攻隊による攻撃は、多くの若者を失うことになったが、これが戦略と思うと実に情けない話である。特攻隊を推進し、出陣を命じていた隊長が、終戦とともに自責の念から自決した人もいたが、一方、「最後に俺も行くから」といって、若者を送り出した隊長達が生き残っていたのも、世間の感覚からみると情けない話である<sup>(39)</sup>。彼らは、戦後生き残った隊員から顰蹙（ヒンシュク）を買っていたが、誠に言葉にならないものがある。こうした話は、当事者以外に誰も分からなかったが、後年になって実態が明らかになったものである。

戦後 70 年ということから、あらためて研究者や専門家により、この戦争に関する調査結果や研究成果が発刊されている。また、「なぜ戦争しなければならなかったのか」や「その結果はどうだったのか」というテーマについて、文末に掲げた多くの書籍が刊行されている（文末の文献番号 39~78 などを参照されたい）。

陸軍が戦争を主導したという見方は一般的であるが、単純なものではなかったことが、多くの研究で明

らかにされている。米内光政、山本五十六、井上茂美の三人が海軍中枢にいたときは、米国との戦争反対、三国同盟反対を明確に主張していた<sup>(40)</sup>。しかし、三人が中央からいなくなった後、嶋田海相は開戦の可否についても、自らの意見を避けて東條総理に一任の立場をとっている。本人の個人的見解として、「米国との戦争には勝てる自信は無い」と思っていたとのことである<sup>(41)</sup>。陸軍でも同じであるが、血気盛んな若手参謀などの「開戦やむなし」という強硬意見に靡いてしまったと考えられている。事前には国力の調査が行われており、我が国の劣勢は明らかであったにも拘らず、開戦に踏み切った判断は、不可解の一語に尽きる<sup>(42)</sup>。また、自存自衛のためにやむを得なかったとする意見は、被植民地の人々のことを、全く考慮しない手前勝手な意見と思われる。理性的な判断ができず、日本独特の精神主義に偏っていたとしか言いようがない。

一方、終戦においても、御前会議において結論が出ず、結局天皇のご聖断を仰ぐことにより、終戦を迎えている<sup>(43)</sup>。これだけ敗戦が続き、多くの国民の犠牲を強いているながら、尚且つ本土決戦を主張する軍部首脳陣がいたことは、忘れるわけにはいかない。

優秀な参謀の多くは、最前線での戦いを知らず、または実戦の経験がなく、戦地での戦いに対して、士気高揚を訴えるだけで、具体的な策は何も与えられなかった。これだけ敗戦の続くなかで、軍部の責任者がこれ以上の犠牲を止め得なかったことは、残念でならない。中枢にいた人たちが、戦後になって如何に立派なことを言っても虚しいばかりである。一般には、陸軍幼年学校、陸軍士官学校、陸軍大学での成績（ハンモック・ナンバー）が生涯の出世に影響を与えていたとされる<sup>(44)</sup>。幼年学校ではドイツ語は習うが、英語の授業はない。普通の中学校から士官学校に進学する人たちは、英語を習ってきている。このことが英米に対する理解に関して、両者に差があった。軍関係のみの学校出身者には、この点がマイナスであったと指摘する人がいる<sup>(45)</sup>。敵国の経済力、軍事力など十分に把握していながら、これを評価しない組織体制や、後方支援について多くの配慮をしなかった軍中枢の無責任または無能力に愕然（ガクゼン）とする。

しかし、戦地で直接指揮を執る指揮官や隊長およびこれに従った兵士には、後世にも伝えられている立派な軍人達がいた。たとえば、硫黄島で戦った三人について、それぞれの記録がある。具体的には、総指揮官の栗林忠道中将や、西竹一部隊長（ロサンゼルス・オ

リンピックの馬術競技で優勝経験あり)について書かれたものがある<sup>(46)</sup>。また、少年兵として最後まで戦った秋草上等兵が(負傷して捕虜となり生環)自ら記した書もある<sup>(47)</sup>。総指揮官、部隊長、兵隊の立場から、目標は同じであっても立場が任務を変えることになる。死と向かい合って、最後まで部下や同僚のことを思いやりながら任務を果たす心意気に胸を打たれる。こうした豊富な実戦経験者、人間らしさのある参謀や士官が、もし中央におれば、また戦争の行方も変わっていたであろう。

終戦となり、戦争犯罪人の裁判が行われていたが、A級戦犯は、東京で裁かれた。東條元総理を含む7名が絞首刑の判決を受けた(昭和23年11月)。ラジオ放送で判決が読み上げられたのを今も覚えている。「Death by hanging」の言葉が、子ども心に堪えた。この死刑判決を受けた7名の中で文官出身者がひとり、他の6人は陸軍出身者であった。また、B級およびC級の裁判も各国で開かれた。それぞれの国での裁判の結果、多くの戦犯者の死刑執行がなされた。A級戦犯が重大な犯罪者とすれば、B級、C級は軽度な戦犯に対する裁判と思っていたが<sup>(48)</sup>、大人になってその意味が分かった次第である。

#### 4 新しい日本に向けて(復興と社会づくり)

これまでの体制を立て直すために、次々に改革がなされた。1946年4月、戦争に協力した旧財閥の解体がなされた。三井、三菱、住友、安田の四大財閥のほか、浅野、中島、古河などの中小財閥も解体され、企業間の持ち株の処分や役員の兼務などが禁止された。また、公職追放により、企業財界人の退陣も強制された。過度経済集中の排除がなされて、旧財閥商号を無くした小規模の企業に分割が行われた。兄と旧制高校と大学が同じであった友人が、名もない企業に就職したことが、ある日茶の間の話題になった。元財閥系総合商社の分社とのことであったが、その当時は、聞いたこともない企業名であった(後年、講和条約が発効するころから、旧財閥系企業の商号復活が行われ、これらの小企業も元の総合商社に統合された)。

また、1946年から農地改革が行われた。長い間、地主と小作人の関係の下で、農民が貧しい生活を強いられていたことから、彼らを解放し、地主から土地を放出させて民主化を図ろうとした政策であった。長姉は新制中学の教師をしていたが、その後、ご縁があって歯科医師と結婚した。嫁ぎ先の義父が旧制中学の校

長をしていたが、この農地改革により不在地主は不利になるとの判断から、校長を退職した後、郷里に帰っていた。その関係で、義兄は親の住む家の近くで、その後開業することになった。当時、親たちが話し合っている話題の中で、農地改革の利害について、身近な問題として聞かされた記憶がある。

このほか、経済の早期復興のために、1946年傾斜生産方式がとられた。当時のエネルギーは石炭であったが、この増産無くして、産業の再生は見込めない。また、鉄鋼が全ての根幹をなす資材であり、石炭と鉄鋼の増産こそ工業の復活を支えるものとして、集中的に支援していく政策がとられたものである。しかし、産業界全般は混乱しているといえた。軍需があった時代は製品すべてが、軍関係先に納入しておれば代金も支払われていたことになる。ところが戦後は、独自の資金調達の上、商品開発や販売先の確保などが、個別企業の判断で行うことになった。つまり、企業経営を全くいちから立ち上げる必要があった。まして、この当時、都会の街は空襲の結果灰燼に帰し、人々は衣食住に苦しんでいた。おそらく何をどうすれば良いか、わからなかったと思われる。こうしたなかで、もっとも早く活況を呈し始めたのは、闇市であった。そこに行けば、食べ物や日用品のほか、身につけるものも売られていた。廃墟の中から、人々が身につまされて集うところとなった。こうした場所から、やがて協同組合や信用組合のような互助組織が生まれている。父が戦時中勤務していた軍需工場も閉鎖となり、新しい組織をどのように立ち上げるか友人たちと模索していた。おそらくこの時代が、父にとって戦後の混乱期中で、もっとも厳しい時代であったかと思われる。

また、労働の民主化が唱えられて、労働組合の結成とともに、労働運動が活発に展開されるようになった。しかし、やがて産業界全体への影響や、ゼネストへの懸念が見られるようになり、GHQ(General Head Quarter)がこれを最終的に中止するよう指示を出した(昭和22年1月)。こうした動きのなかで、昭和24年7月下山事件および三鷹事件、そして、同年8月松川事件など不可解な事件が相次いで起きた<sup>(49)</sup>。

しかし、昭和25年6月25日に突如起こった朝鮮戦争が、これまで沈滞していた産業界に対して特需をもたらした。日本の戦後景気を立て直す重要な契機となった。他国の戦争が、自国の産業を活性化させるという皮肉な出来事といえた。

朝鮮戦争の始まりとともに、伊丹空港から連日戦闘機や爆撃機が飛び立っていった。何十という戦闘機の

編隊が飛び立つさまは、凄まじいものがあった。つい数年前には、日本が爆撃を受けていたことを思うと、早く納まってほしいと思うばかりであった。

しかし、昭和 26 年 7 月、朝鮮戦争の休戦会談が始まり、世の中は落ち着きを取り戻してきた。我が国も同年の 9 月に、サンフランシスコ講和条約を締結するに至った。戦後の混乱から、復興の兆しが明らかになってきたといえる。

## 5 むすびにかえて

戦後 70 年という月日の流れの中で、太平洋戦争を知らない人たちが増えてきた。さらに、学生の中には、米国と戦争したことさえも知らない者もいると聞く。厳密には、米国、英国、オランダ、中国と戦っていたことになるが、その後オーストラリア等も加わり、最終的には、ソ連が参戦し程なく終戦を迎えた（北方四島問題<sup>50</sup>はこの時に生まれて、今日に至っている）。

悲惨な戦争、空襲の恐怖そして戦後の混乱と飢えを幼児から子ども時代に体験した者として、今の時代がいかに恵まれているかを人々に理解してもらいたいと思う。とくに現在の子どもは、塾での学習や音楽のレッスンに励む者もおれば、サッカーや野球に自分の力を発揮しようとする者もいる。多様な選択肢のなかで、自分が取り組みたい分野に進進できる時代といえる。戦時中といえば、みんな軍国少年・少女であり、国の求める方向に、いやおうなく力を注がねばならなかった。それだけではなく、軍備最重点の下では、個人の生活は全く惨めであった。とくに、食糧難は厳しいものがあり、多くの人々は栄養失調の状態であった。現在の飽食時代に満ち足りた生活を送る人々には、想像もできない状況である。戦争がもたらす悲惨かつ貧しい時代と、現在の豊かで平和な時代との彼我（ヒガ）の差は明らかといえる。

ここで強調しておきたいことは、ただ、戦争が悪であるという単純な結論ではなく、太平洋戦争についての理解を深め、**その反省から教訓を得る**という思考過程が要るということである。その結果として、戦後の平和を引き続き維持していくことが求められることになる。最近の諸情勢を見るに、このことがさらに重要な課題になっていると考えられる。

本稿では、戦中・戦後の世の中について、幼少期の体験をもとに記述したが、その背景にある太平洋戦争については、詳しく議論しているものではないことをことわっておく。したがって、先の大戦について理解

を深めるためには、少なくとも下記の書などを参考にし、自らの考えを整理することが求められよう。

1. 帝国主義形成の過程となった戦前の昭和について  
戦前の昭和時代を正確に知るには、筒井清忠編『昭和史講義』がある（文献番号 30）。さらに、小林英夫『日本近代史を読み直す』も読みやすく入門書として恰好である（文献番号 50）。また、立花隆『天皇と東大』では、日本近現代史における天皇の役割と、その舞台となった東大について、明治・大正・昭和を通して両者の立場が明らかにされており、読み応えがある。政党政治から軍部の指導による政治に変わっていったのは、天皇機関説にかかる論争や、その後の 5.15 事件や 2.26 事件などが一つの契機になっていったと考えられる（文献番号 29）。

なお、2.26 事件の思想的背景にあった北一輝について、松本健一『北一輝論』が参考になる（文献番号 99）。また、テロを起こした青年将校たちは、自分たちの多くは農村や中流以下の階級出身ということで、北一輝の思想に親和性を求めるころがあった。一人一殺を目指す血盟団についても、前途有望な若者や学生が、日蓮宗の僧井上日召に共鳴することとなり、テロ行為に走った。これについて、中島岳志『血盟団事件』があるので参照されたい（文献番号 59）。

## 2. 太平洋戦争開戦に至る過程について

太平洋戦争の開戦に至るまで、どのような議論がなされたか、以下の書を参考にされたい。加藤陽子『それでも日本人は『戦争』を選んだ』および『満州事変から日中戦争へ』があり、吉田裕『アジア・太平洋戦争』が挙げられる（それぞれ文献番号 47,46,76）。また、NHK 取材班編『日本人はなぜ戦争に向かったのか』は読みやすく理解しやすい（文献番号 40）。さらに中村燦『大東亜戦争への道』は、掘り下げて学びたい人にとって格好の書である（文献番号 60）。なお、渡部昇一の『自衛の戦争だった『昭和』の大戦』では、戦争の原因は、遠因がアメリカによる日本人の移民排斥の問題と、近因はアメリカの日本に対する石油の禁輸であるとしており、侵略戦争ではなく自存自衛のための戦いであったという指摘がある。東條総理大臣の責任を問う主張が多いなかで、少し見解が異なるところがユニークである（文献番号 78）。なお、早坂隆『永田鉄山 昭和陸軍「運命の男」』は、永田鉄山が相沢中佐に殺されなかったら、太平洋戦争にならな

かったであろうという見方が披露されている（文献番号 62）。

### 3. 太平洋戦争の開戦通告が遅れた理由について

また、開戦の布告が遅れたのは何故かについて、斎藤充功『開戦通告はなぜ遅れた』がある。あまり語られないテーマであるが、ひとつのとらえ方であろう（文献番号 51）。一般には、米国駐在大使館における、開戦通告の翻訳に時間がかかったといわれている。これについて、半藤一利『真珠湾の日』、吉村昭『大本営が震えた日』にも詳述されている。既に、米国に暗号解読がなされており、日本の動きは把握されていた。「日本側に先に軍事行動させよ」などの命令も国防省から出されていた。結果として国際規約に則らない日本の開戦について、各国から非難を浴びることとなった（それぞれ文献番号 64、77 参照）。

### 4. 真珠湾攻撃以降の連戦連敗について

ミッドウェー海戦以降、連戦連敗が続いたが、何処に問題があったのか、如何なる作戦が採られたのか、これらについて以下の書がある。杉之尾宜生『大東亜戦争敗北の本質』は、日本の情報収集力の無さと兵站の弱さが致命的であったと指摘する（文献番号 55）。保阪正康『あの戦争は何だったのか』で、太平洋戦争の開戦から敗戦に至る軍中央の動きを追っている（文献番号 70）。また、各地での戦争について克明に記録した児島襄『太平洋戦争上・下』がある。それぞれの戦闘が如何に進められたのか詳細な記録である。このように敗戦が続かなかで、誰も中止を唱えられなかったのは、何故なのか？大和魂など日本独特の精神主義が問題であったとしか言いようがない（文献番号 49 参照）。

### 5. 終戦に向けて

ポツダム宣言受託直前まで、軍部はまだ本土決戦を唱えていた。これに備えて、竹槍が準備されていたという。原子爆弾の時代に竹槍では、如何ともしようのない状況といえた。ポツダム宣言受託に際し、天皇のご聖断を仰ぐ過程について、半藤一利『日本のいちばん長い日』があり、伊藤之雄『昭和天皇伝』を参照されたい（文献番号 65、1）。

本稿では、筆者が幼少時に体験した戦争の悲劇や苦難について記述しており、もし、戦争が起きれば、どのような事態になるのか明示したつもりである。筆者

の願いは、こうした記述内容から、今日の平和と豊かさを人々に実感してもらうことにある。今後の平和を議論するにあたり、このような一個人の記録ではあるが、いささかなりとも役立てばありがたいと思っている。

## 謝 辞

山下博之（郷土史研究家）、野畑康（元ダイヘン環境管理部長）、栗本征彦（友人）、浅葉正美（元大和銀行システム部部长代理）各位から貴重な意見を頂いた。

また、遠藤加壽子（新生銀行コンプライアンス統轄部 金融情報管理室 室長代理）、長岡智寿子（国立教育政策研究所フェロー）、長岡健壽（サントリー食品インターナショナル（株）品質保証・技術部 部長）、松平史寿子（日本貿易振興機構 企画部海外事務所運営課 課長代理）、興石健太郎（文京第六中学）および妻宣子からもコメントを得た。記して謝す。

## 注

- (1) 昭和 16 年に小学校から国民学校に改められた初等教育学校である。初等科 6 年・高等科 2 年。昭和 22 年に再び小学校となった。国民学校令（昭和 16 年勅令第 148 号）は、昭和 16 年 4 月 1 日施行。
- (2) 太平洋戦争下において、昭和 18 年に学生（主として法文科系）の徴兵猶予が停止されて、陸・海軍に入隊・出征したこと。
- (3) 機械水雷のこと。多量の爆薬を入れて、水面下または海底に敷設し、艦船が触れると爆発し、破壊・沈没させる水雷。
- (4) 戦前、宮内省から各学校に下付された天皇・皇后の写真。
- (5) 二宮尊徳。江戸末期の篤農家。徹底した実践主義を貫き、陰徳・積善・節儉を力行して、殖産のことを説いた。
- (6) 北杜夫『どくとるマンボウ追想記』p.69 参照。安岡章太郎氏の幼いころの経験を伝えている。
- (7) 海軍短期現役主計科士官学校は、早期に士官を養成するために、設立された軍の学校で、「短現」と呼ばれていた。海軍が短現の制度を発足させたのは、昭和 13 年 7 月で、主計科士官の不足を補うため、大学を卒業後企業や官庁に採用されたばかりの若者から、主計科士官候補を募集し、一定期間服役させた後、再び企業等に戻すことを考えていた。服役期間は二年であったが、戦況とともに次第に永くなっていった。市岡揚一郎『短現の

- 研究』 p.7-8 参照。
- (8) フランス語。厚地の木綿・朝・ラシャ・革製で、すねを包む服装品。外側を紐で編み上げるものと、巻きつけるものとある。
- (9) 地に伏して、手と足で這うこと。
- (10) 中島欣也『破帽と軍帽—旧制新潟高校 ある師弟の物語—』がある。旧制高校への配属将校と高校生との終生続いた絆は、当時でも珍しい話であった。
- (11) 赤色の紙を用いたからいわれる。軍の召集令状。
- (12) 松の根株または松枝を乾溜して得る油のこと。成分はテレピン油に似ている。ペンキ・ワニスなどの溶剤に用いる。
- (13) 太平洋戦争下の女子の勤労働員組織。満 12 歳以上 40 歳未満の女子により居住地・職場で編成された。一年間工場・農村に勤労奉仕することが求められた。
- (14) 猪瀬直樹『昭和 16 年夏の敗戦』 p.154-155 参照。
- (15) 竹の子の皮をはぐように、衣類その他の所有品を売って生活費に充てる暮らし。
- (16) 第二次大戦下、国民統制のために作られた地域組織。町内会の下に作られ、食糧・その他生活必需品の配給などを行った。
- (17) 千人の女性の思いが縫い付けられていることから、敵弾も避けて通るといふ言い伝えから、出征兵士に対して千人針が街角で通行女性に求められていた。「死線を超える」というまじないから、「五銭」を縫いつけることも行われた。三国一朗『戦中用語集』 p.96-97 参照。
- (18) 甘粕正彦 (1891-1945) 憲兵時代、大杉栄、伊藤野枝などを捕えて虐殺した。刑に服していたが、その後釈放されて満州に渡り、軍の特務工作に関わった。また満州国建国においても愛新覚羅溥儀を元首に引っ張り出す任務にも勤めた。表面的には、「五族協和」のための映画製作に当たっていたが、背後で植民地政策を推進する片棒を担っていたと言える。満映では、李香蘭も女優として出演していた。なお、甘粕正彦は、終戦により服毒自殺している。芳地隆之『ハルビン学院と満州国』 p.175-179 参照。
- (19) 太田尚樹『満州裏史』 p.473-475 参照。
- (20) 寺尾紗穂『評伝 川島芳子』 p.10-11 参照。村松梢風により、婦人公論で『男装の麗人』として、川島芳子のことが取り上げられて、話題を呼んだこともあった p.142-165 参照。
- (21) 多数の芸能人が慰問に派遣されたが、ここでは代表的な 4 人について記しておく。  
淡谷のり子 (1907-1999) 東洋音楽学校卒。ブルースの女王と呼ばれた。「別れのブルース」などヒット曲がある。藤山一郎 (1911-1993) 東京音楽学校卒。「丘を越えて」などヒット曲多数。霧島昇 (1914-1984) 東洋音楽学校卒。「旅の夜風」など多くの歌を歌っている。渡辺はま子 (1910-1999) 武蔵野音楽学校卒。「支那の夜」など多数の歌がある。
- (22) 加藤大介『南の島に雪が降る』参照。ニューギニア戦線で死の淵をさまよう兵士を鼓舞するために、部隊内の経験者を募り、劇団を作っている。舞台上で雪を降らせると、多くの兵士は故郷を思い出し、胸を震わせて泣いたという。自身の経験であり、胸を打つものがある。
- (23) 天皇の直々の放送のこと。一般国民は、これまで天皇のお言葉を直に聞くことはなかった。
- (24) シャリとは、俗に米のこと。銀シャリで白米を指す。1940 年代の我が国における食糧不足時代の言葉である。
- (25) DDT は、有機塩素系の殺虫剤のひとつである。現在我が国では、環境汚染防止のため使用を禁止している。
- (26) 東亜同文書院は、戦前上海に設立された高等専門学校 (後に大学になった) の一つである。このほか、ハルピン学院や現在のベトナムに南洋学院が設立されたが、終戦により廃校となった。
- (27) 当時のダイナマイト打線は、一番センター呉、2 番レフト金田、3 番ライト別当、4 番サード藤村、5 番キャッチャー土井垣、6 番セカンド本堂、7 番ファースト玉置、8 番 (ピッチャーで、若林、梶岡、御園生など試合によって変わる) 9 番ショート長谷川であった。  
なお、戦前にも、松木、景浦選手などがいたころも、この名が使われたことがあった。しかし、選手が次々と徴兵されて自然消滅している。また、バース、掛布、岡田選手などがいたころ、新ダイナマイト打線などと呼んだこともあった。
- (28) 秦郁彦『靖国神社の祭神たち』 p.236 参照。真岡電話局の九人の女子交換手は、ソ連軍が侵攻してきた 45 年 8 月 20 日、最後まで職場を離れず、「皆さんこれが最後です。さようなら。さようなら」と連絡したのち、青酸カリを用いて自決した。現在、靖国神社に合祀されている。

- (29) シベリアに抑留されて、厳寒の中、辛い仕事を強制された経験を記録した作品がある。経験者しか分からないとはいえ、この事実を後世に引き継ぐことが求められている。西村渥美『凍結』を参照されたい。
- (30) 澤地久枝『14歳＜フォーティーン＞ 満州開拓村からの帰還』では、本人が満州での敗戦により、難民生活をしながら壮絶な引き揚げ体験を語っている。なお、終戦時の満州で、満州中央銀行に勤めていた人の奇跡的生還の記録として、武田英克『満州脱出』がある。
- このほか、満州ではないが、兵隊として捕虜となった経験を記録した作品として有名な大岡昇平『俘虜記』がある。また、松木謙治郎『阪神タイガース松木一等兵の沖縄捕虜記』も、沖縄での悲惨な戦いと、捕虜になった後の記録がある。過酷な戦争と、捕虜として生き延びた人の想いが、伝わってくる。
- なお、沖縄の戦いは沖縄本島が戦いの舞台となったが、竹富島などは米軍の攻撃は機銃掃射以外なかった（当時、叔父大石喬元大尉が竹富島の守備隊長として、任務についていた）。この当時の堅い絆が縁となって、竹富島を守っていた高知の大石隊と、同島の島民との密接な付き合いが、戦後も永く続いたことの記録が残されている（鍋島寿美枝『うつぐみは時を超えて』参照）。
- (31) ユネスコは、シベリア抑留の苦難な生活を強いられた資料を、世界記憶遺産に登録すると決定した。これについて、日本経済新聞 2015.10.10（夕刊）を参考にした。
- (32) 石坂洋次郎著の『青い山脈』は、映画化されて、池邊良、原節子、杉葉子などが出演した。ちょうど姉が中学の先生をしていた関係から、ある日教え子の男子生徒数名が、我が家に遊びに来たことがあった。姉は、この生徒たちを連れて、青い山脈を見にいったが、その際4年生ぐらいだったが、私も連れて行ってくれた。映画を見ながら生徒たちが、「オイ、先生 杉葉子に似とるなあ」といって囁いているのを、横で見ているのを思い出す。
- (33) この歌の歌詞は次の通り。
- Come come everybody.  
How do you do, and how are you?  
Won't you have some candy,  
One and two and three, four, five?  
Let's all sing a happy song,  
Sing tra-la la la la.
- (34) 「二重の扉」は、藤倉アナウンサーが司会をし、ヒントを与えて、二十問以内に、回答者から正解を求められる番組。1947年から1960年まで続いた人気番組であった。「とんち教室」も、青木アナウンサーが司会を務めて、1949年から1968年まで続く番組であった。
- (35) 戦艦・巡洋艦などに装備してカタパルト（射出機）により、離陸する航空機のこと。日本近辺まで軍艦が迫ってきて、こうした艦載機による空襲も頻繁に行われた。なお、B29などの爆撃機は、サイパン島などから飛来していた。
- (36) 警戒警報が鳴り、その後空襲警報が鳴るとは限らなかった。突然、爆撃が始まる場合や、警戒警報や空襲警報と同時に爆撃されることもあった。通常、警戒警報のサイレンは、一定の音域で鳴り続ける。空襲警報は、二つの音域の範囲で上下鳴りつづける（6秒間に十回上下波のように鳴らされる）。
- (37) 米国に対する開戦通告が遅れて、真珠湾攻撃が先にはじめられた。このことは、誰もが落ち度のないようにすべしといていたにも関わらず、時間が過ぎてしまった。卑怯な日本のイメージが、この件で植えつけられた。
- (38) 多くの一般国民が巻き添えになった。戦陣訓により、兵は捕虜になることよりも、最後の一兵まで戦えということを守り、その結果玉砕することになった。当然、相手国にも被害を与えたことなど軍幹部の責任は重大であった。終戦とともに、責任を感じて自決した人たちもいたが、東條元総理は自決に失敗し、東京裁判で死刑宣告を受けている。戦陣訓を主張する本人が、これを守れなかったことに疑問を感じている人がいる。
- (39) 比島方面軍陸軍航空部隊指揮官の富永恭次は、特攻隊メンバーに「最後の機で俺も行く」と励ましていたが、その後台湾に敵前逃亡している。また、第六航空軍司令官の菅原道大中将も、「俺も後から行く」といって、若い特攻隊に出撃の命令を出しながら、本人はその責任を取っていない。半藤一利、保阪正康『昭和の名将と愚将』p236-250 参照。
- (40) 半藤一利ほか『昭和陸海軍の失敗』p.155-168 参照。米国との戦争に反対していた三人は、以下の人々である。
- 米内光政(1880-1948) 海軍兵学校卒。首相、海軍大将歴任。山本五十六(1884-1943) 海軍兵学校卒。

聯合艦隊司令長官。井上茂美 (1889-1975) 海軍兵学校卒。海軍大将歴任。

- (41) 同上 p.174-186 参照。
- (42) 猪瀬直樹『昭和 16 年夏の敗戦』は、内閣総力戦研究所における活動とその結論に至る経緯が、詳細に語られている。日米戦は、日本が必敗するという結論は、受け入れられなかった。
- (43) 筒井清忠編『昭和史講義』p.247-262 参照。
- (44) 半藤一利、保阪正康『昭和の名将と愚将』p.122 参照。
- (45) 梯久美子『散るぞ悲しき』p.141-142 参照。また、半藤一利ほか『昭和陸海軍の失敗』p.80-83 参照。
- (46) 栗林中将については、梯久美子『散るぞ悲しき』があり、城山三郎『硫黄島に死す』では、西竹一部隊長についての壮絶な記録がある。
- (47) 秋草鶴次『一七歳の硫黄島』がある。筆者が一五歳で海兵団にはいり、一七歳の時に硫黄島で戦った記録である。負傷して生き残ったが、その経験を記録している。
- (48) 戦犯には、「平和に対する罪」で、連合国十一カ国が極東国際軍事裁判において、日本の国家指導者を裁いた A 級と、「戦争の法規または慣例」に違反した者を処罰する BC 級に大別されている。BC 級では逮捕者約 15,000 人のうち、934 人が死刑執行された。なお、ソ連、中共による別系統の死刑執行があったが、詳細は不明である。秦郁彦『靖国神社の祭神たち』p.157-158 参照。
- (49) 24 年 7 月から三つの事件が短期間のうちに発生した。このうち下山事件は迷宮入りの事件であるが、最近柴田哲孝『下山事件 暗殺者たちの夏』が刊行されて、一つの見方が述べられている。
- (50) 中名生正明『尖閣、竹島、北方四島』を参照されたい。

## 参考文献

### 1. 戦中の時代、世相、社会

- 1) 伊藤之雄．昭和天皇伝．文芸春秋，2012.
- 2) 井上寿一．理想だらけの戦時下日本．ちくま新書，2013.
- 3) 猪瀬直樹．昭和 16 年夏の敗戦．中公文庫，2015.
- 4) 入江曜子．溥儀—清朝最後の皇帝．岩波新書，2006.
- 5) NHK「あの日 昭和 20 年の記憶」取材班．あの日 昭和 20 年の記憶．NHK 出版，2006.
- 6) 河出書房新社編．昭和十三年生まれ．河出書房新

社，1978.

- 7) 菊池信平編．昭和十二年の「週刊文春」．文芸春秋，2007.
- 8) 工藤美代子．われ巢鴨に出頭せず．日本経済新聞，2006.
- 9) 佐野眞一．あんぱん 孫正義伝．小学館，2012.
- 10) 澤地久枝．わたしが生きた「昭和」．岩波書店，2000.
- 11) 白石仁章．諜報の天才杉原千畝．新潮選書，2014.
- 12) 武田知弘．教科書の載っていない 戦前の日本．彩図社，2009.
- 13) 多仁安代．大東亜共栄圏と日本語．勁草書房，2003.
- 14) 寺尾紗穂．評伝 川島芳子 男装のエトランゼ．文春新書，2008.
- 15) 徳永徹．少年たちの戦争．岩波書店，2015.
- 16) 戸部良一．逆説の軍隊．中央公論社，1998.
- 17) 西尾幹二．わたしの昭和史 1・2—少年編—．新潮選書，1998.
- 18) 西岡香織．シンガポールの日本人社会史．芙蓉書房出版，1997.
- 19) 三国一郎．戦中用語集．岩波新書，1985.
- 20) 安岡章太郎．僕の昭和史．新潮文庫，2005.
- 21) 山田風太郎．昭和前期の青春．筑摩書房，2007.
- 22) 山本夏彦／久世光彦．昭和恋々 あのころ、こんな暮らしがあった．文春文庫，2002.
- 23) 吉田満．戦中派の死生観．文春文庫，1984.

### 2. 当時の学校と歴史

- 24) 市岡揚一郎．短現の研究．新潮社，1987.
- 25) 亀山哲三．南洋学院．芙蓉書房出版，1996.
- 26) 北杜夫．どくとるマンボウ追想記．中央公論社，1976.
- 27) 黄文雄．中学生に教えたい日本と中国の本当の歴史．徳間書店，2012.
- 28) 竹内洋．学歴貴族の栄光と挫折．中央公論新社，1999.
- 29) 立花隆．天皇と東大 大日本帝国の生と死 上・下．文芸春秋，2005.
- 30) 筒井清忠編．昭和史講義．ちくま新書，2015.
- 31) 中島欣也．破帽と軍帽 旧制新潟高校ある師弟の物語．恒文社，1987.
- 32) 西尾幹二．国民の歴史．産経新聞社，1999.
- 33) 西所正道．「上海東亜同文書院」風雲録．角川書店，2001.

- 34) 秦郁彦．旧制高校物語．文芸春秋，2004.  
 35) 藤岡信勝 自由主義史観研究会．自由主義史観，  
 21世紀に向けて 教科書が教えない歴史．産経  
 新聞社，1999.  
 36) 三浦英之．五色の虹 満州建国大学卒業生たちの  
 戦後．集英社，2015.  
 37) 芳地隆之．ハルビン学院と満州国．新潮選書，  
 1999.  
 38) 早稲田大学 大学史資料センター，慶応義塾福澤研  
 究センター．1943年晩秋 最後の早慶戦．教育評  
 論社，2008.

### 3. 太平洋戦争と戦争への過程

- 39) 秋草鶴次．十七歳の硫黄島．文芸春秋，2007.  
 40) NHK取材班編．日本人はなぜ戦争へと向かったの  
 か 上・下および戦中編．NHK出版，2011.  
 41) 大岡昇平．俘虜記．新潮文庫，2010.  
 42) 太田尚樹．満州裏史．講談社文庫，2011.  
 43) 梯久美子．散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠  
 道．新潮社，2005.  
 44) 加藤聖文．「大日本帝国」崩壊 東アジアの1945  
 年．中公新書，2009.  
 45) 加藤大介．南の島に雪が降る．ちくま文庫，2015.  
 46) 加藤陽子．満州事変から日中戦争へ．岩波新書，  
 2007.  
 47) 加藤陽子．それでも、日本人は「戦争」を選んだ．  
 朝日出版社，2009.  
 48) 栗原俊雄．戦艦大和 生環者たちの証言から．岩  
 波新書，2007.  
 49) 児島襄．太平洋戦争 上・下．中公新書，2010.  
 50) 小林英夫．日本近現代史を読み直す．新人物往来  
 社，2012.  
 51) 斎藤充功．昭和史発掘 開戦通告はなぜ遅れたか．  
 新潮新書，2004.  
 52) 澤地久枝ほか．日本海軍はなぜ過ったか．岩波書  
 店，2011.  
 53) 島本慈子．戦争で死ぬ、ということ．岩波新書，  
 2006.  
 54) 城山三郎．硫黄島に死す．新潮文庫，2007.  
 55) 杉之尾宜生．大東亜戦争敗北の本質．ちくま新書，  
 2015.  
 56) 武田英克．満州脱出．中公新書，1985.  
 57) 田中克彦．ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国．  
 岩波新書，2009.  
 58) 戸川猪佐武．東條英機と軍部独裁．講談社，1982.

- 59) 中島岳志．血盟団．文芸春秋，2013.  
 60) 中村燦．大東亜戦争への道．展転社，2006.  
 61) 秦郁彦．靖国神社の祭神たち．新潮選書，2010.  
 62) 早坂隆．永田鉄山 昭和陸軍「運命の男」．文芸春  
 秋，2015.  
 63) 半藤一利．ノモンハンの夏．文芸春秋，1998.  
 64) 半藤一利．真珠湾の日．文芸春秋，2001.  
 65) 半藤一利．日本のいちばん長い日．文春文庫，  
 2006.  
 66) 半藤一利．あの戦争と日本人．文芸春秋，2011.  
 67) 半藤一利．聯合艦隊司令長官 山本五十六．文芸  
 春秋，2011.  
 68) 半藤一利＋保阪正康．昭和の名将と愚将．文春新  
 書，2014.  
 69) 半藤一利ほか7名．昭和陸海軍の失敗 彼らは  
 なぜ国家を破滅の淵に追いやったか．文芸新書，  
 2008.  
 70) 保阪正康．あの戦争は何だったのか 大人のため  
 の歴史教科書．新潮新書，2005.  
 71) 細谷千博、本間長世、入江昭、波多野澄雄編．太  
 平洋戦争．東京大学出版会，1993.  
 72) 堀越二郎．零戦 その誕生と栄光の記録．角川文  
 庫，2013.  
 73) 松木謙次郎．阪神タイガース松木一等兵の沖縄捕  
 虜記．現代書館，2012.  
 74) 百田尚樹．永遠のゼロ．講談社文庫，2009.  
 75) 山室建徳．軍神 近代日本が生んだ「英雄」たち  
 の軌跡．中公新書，2007.  
 76) 吉田裕．アジア・太平洋戦争．岩波新書，2007.  
 77) 吉村昭．大本営が震えた日．新潮文庫，1980.  
 78) 渡部昇一．自衛の戦争だった「昭和の大戦」．  
 WAC，2015.

### 4. 戦後の苦難と混乱

- 79) 荒井利子．日本を愛した植民地．新潮新書，2015.  
 80) 木村元．学校の戦後史．岩波新書，2015.  
 81) 梯久美子．昭和20年夏、子供たちが見た日本．  
 角川書店，2011.  
 82) 澤地久枝．十四歳＜フォーティーン＞満州開拓村  
 からの帰還．集英社新書，2015.  
 83) 團伊玖磨．好きな歌・嫌いな歌．文春文庫，1979.  
 84) 中名生正昭．尖閣、竹島、北方四島．南雲堂，  
 2011.  
 85) 西村渥美．凍結．近代文藝社，1995.  
 86) 西村誠ほか4名．日本人なら知っておくべき 東

京裁判．総合図書，2015.

## 5. その他（1）

- 87) 有沢広巳監修 安藤良雄ほか編集．昭和経済史  
上 下，1980.
- 88) 丘灯至夫監修．一億人の昭和史 昭和の流行歌手．  
毎日新聞社，1978.
- 89) 北中正和．ギターは日本の歌をどう変えたか．平  
凡社新書，2002.
- 90) 金時鐘．朝鮮と日本に生きる．岩波新書，2016.
- 91) 合田道人．本当は戦争の歌だった 童謡の謎．祥  
伝社，2005.
- 92) 柴田哲孝．下山事件 暗殺者たちの夏．祥伝社，  
2015.
- 93) 辻田真佐憲．日本の軍歌 国民的音楽の歴史．幻  
冬舎新書，2014.
- 94) 鍋島寿美枝．うつぐみは時を超えて ー沖繩・竹  
富島と高知の絆ー．筒井紙業印刷，2003.
- 95) 乃南アサ．美麗島紀行．集英社，2015.
- 96) 野ばら社編集部．心のうた 日本抒情歌．野ばら  
社，2000.
- 97) 野ばら社編集部．唱歌 明治・大正・昭和．野ば  
ら社，2000.
- 98) 倍賞千恵子 西脇久夫 長田暁二．誰もが軍歌を  
口ずさんでいた．中央公論 p54-63, 2015 ,09.
- 99) 松本健一．北一輝論．講談社学術文庫，2002.
- 100) 矢部洋三・古賀義弘・渡辺広明・飯島正義編．新  
訂 現代日本経済史年表．日本経済評論社，2002.
- 101) 山口淑子，藤原作弥．李香蘭私の半生．新潮文庫，  
1990.
- 102) 山口淑子．「李香蘭」を生きて．日本経済新聞，  
2004.
- 103) 横田憲一郎．教科書から消えた唱歌・童謡．扶桑  
社，2004.

## 6. その他（2）

キングレコード．軍歌・戦時歌謡．2006.